

〔翻刻〕 松下清雄 ヲユダの裏切り、に関するメモ

——ハーバート・クロスニー著『ユダの福音書を追え』への
書き込みが現示するもの——

内藤由直（解題・翻刻）

〔解題〕

本資料は、松下清雄蔵書の一冊である『ユダの福音書を追え』（ハーバート・クロスニー著 日経ナショナル ジオグラフィック社 2006年5月）に書き残された『ユダの裏切り、に関するメモ』を複製・翻刻したものである。

二千冊を越える故・松下清雄の蔵書は、遺族である松下静枝氏より立命館大学へ寄贈され、現在「松下清雄文庫」として整理・保管されている。その詳細は岩間優希氏・原祐介氏が作成した「松下清雄蔵書目録（1）～（3）」¹⁾に掲載されており、本目録の備考欄からは数多くの蔵書中に書き込みや赤線が記入されていることを看取できる。その中から特に本書への書き込みを前景化するのには、このメモの内容が松下の遺作である『草青火——鳴かなかった鳥たちの祀り』（新制作社 2006年8月、以下『草青火』と略記）、および松下が人生を懸けた戦後学生運動・農民運動の読解にとって大きな意味を持つものと考えられるからである。

メモは、以下の【写真1～4】で掲げたように、書籍本文の余白に六頁に渡って鉛筆で記入されている。非常に細かい文字であるが、丁寧な楷書で書かれており判読に窮することはない。

松下が本書を読み、書き込みを行ったのは、2006年の5月頃であると考えられる。なぜなら、同月28日に原稿が完成²⁾した『草青火』の中に、この『ユダの裏切り、に関するメモ』の記述があるからだ。『草青火』第七章以降には、『ユダの福音書を追え』が取り上げる「イスカリオテのユダの福音書」の話題が度々叙述されている。例えば、作品の中でミミズクの親子とカラスが対話する場面には、ユダの福音書に纏わる話題が次のように記されている。

ジャ、話シテ聞カセルトネ。コノ『イスカリオテノユダノ福音書』ツテノハ、極ク最近ニナツテヨウヤク日ノ目ヲ見タ、呪ワレタ地獄ノ福音書ナンド。

ヘエー、ゾクゾクスルナ。デ、ソコニハ何ガ書カレテイルノ？

マ、極ク極クカイツマンデ内容ヲ話スト、コウユウコトダ。裏切者ユダハ本当ハ裏切者ナンカジャ無ウテ、実ハ師イエスノ最モ信頼スル、最モ忠実ナ弟子ダツトユウダ。ソノ証拠ニ、ソコニハ。

ソコニハ？

コウ、ハッキリ記サレテイル。ツマリ、師イエスハユダニコウ言ツタ。「目ヲ上ゲ、雲トソノ中ノ光、ソレヲ囲ム星々ヲ見ナサイ。皆ヲ導クアノ星ガ、オ前ノ星ダ」ト。

ヘエー、スッゴイ、最高ノ信頼、褒メ言葉、礼賛ダネ。

ダロウ。

ソレガ、デモ、ドッシテ裏切ッテ、売り渡シタノ？

裏切ッタンジャナイ、売ッタンジャナイ。真実ハ——真実ハ、師ノ命ニヨリ、ソウシタ
ンダ。

(松下清雄『草青火』新制作社 2006年 pp.218 - 9, 傍線引用者)

以下の【写真1】 p.33部分で松下がチェック記号を付している箇所の本文を見れば、それが上記の引用において傍線を付した部分と対応しているのがわかる。つまり、松下が書き込みを施した『ユダの福音書を追え』と『草青火』は、プレテキストとテキストの関係にあるのである。

『ユダの福音書を追え』が出版され、『草青火』の原稿を執筆していた時、松下は既に余命半年を宣告され、東京町田市にあるあけぼの病院へ入院中であった³⁾。松下は、病床で本書を読み、ユダの裏切り、について考え続け、抗がん剤も効かなくなった体でメモを書き込んでいたのである。そして、松下は『草青火』を完成させた後の8月21日に死去している。製本された『草青火』が届けられたのは、亡くなった二日後の8月23日であった。

松下が死の直前までユダの裏切り、について思考し続けていたことは、この問題がそれまでの彼の活動に深く関わっていることを示唆している。そのことは例えば、前作『三つ目のアマンジャク』（論創社 2004年）が、村と親友を裏切った主人公「おれメ」の物語であったことからも忖度できる。さらに、松下が50年間沈黙を守っていた「スパイおまた事件」への関与は、後に自らのユダの裏切り、が当時の学生運動を壊滅させたのではないかという疑心を招き、自殺を考えるまでに自己を追い詰めることとなった⁴⁾。松下は終生、このユダの裏切り、の問題を内に抱え、自問自答しながら生きてきたと言っても過言ではない。

以下に翻刻したメモの記述からは、松下がユダのユダの裏切り、に関する評価の転倒に強い関心を抱いていたことが伺える。裏切者の汚名を着せられたユダが実は「変革」の中心を担っていたという価値転倒は、「小さなユダのような存在」⁵⁾として形象化される『草青火』の主人公の存在理由を再確立する認識の転換として表れる。そして、その認識の転換は、何よりも松下自身に、自己の「生」を再構築する観点を与えたはずだ。

だが、松下はこの認識の転換によって裏切りを免罪し、行為の合理化を図ったわけではない。【写真3】 p.56部分の書き込みには、「まったく異なったモラル、倫理あるいは倫理観（感）がありえてもいいではないか。たとえば「殺すな」「殺してもいい」のほかに、もうひとつの。それとユダ、ユダとイエス、との関係——。」と記されている。裏切りか変革か、決定不可能な両義的評価の中で、第三の道を模索すること。松下が最期に到達した地点が、この記述から垣間見られるのである。

そのことは、『三つ目のアマンジャク』と『草青火』の決定的な違いに現れている。『三つ目のアマンジャク』では、主人公「おれメ」が裏切った親友「与五」の代わりに柩へ入り、自ら深い谷底へ落ちて自己の身体をケモノの餌とするところで物語が終わる。この絶望的な結末に対して『草青火』のラストシーンでは、青火によって焼き尽くされた草原の中に二人の子どもが燃えずに残った草を見つける場面が描かれる。

二人の子は何かを見つけたみたいで、草原の上に腰をおろします。
この草、燃えないで残ってる、
女の子が驚いたように言います。
そりゃそうさ、いくら草原を焼きつくした火でも、草の一本一本までは。
そうね、でも、すごい燃え跡。
ひどく焼けてるね。でも、生きものって、しぶといネ。そんななかでも、しぶとく生き残って
るなんて。

(松下清雄『草青火』新制作社 2006年 p.331)

焼け跡に佇む二人の子は、「山人たちの丘」と呼ばれ農民たちの抗争の舞台であったその場所を「チューとチャヨコの丘」と新たに名付けて立ち去っていく。地名に刻印された対立の歴史を焼き尽くし、別様の名前を付与することによって新しい歴史を創出していく出発点がここには記されている。そして、その新たな歴史を担うのは、「しぶとく生き残っ」た僅かな草である。松下清雄亡き後の現在において、この焼け残った草とは、すなわち読者である私たちであると考えられるだろう。

私たちは現在、松下が残した膨大な資料を通して彼が従事した戦後学生運動・農民運動の再検証を迫られている。そこには様々な組織間の抗争があり、`裏切り。があったはずだ。相容れない対立の歴史をどのように再構成し、記述し得るのか。そして、そこからどのような未来への展望を析出し得るのか。松下が残したメモ書きは、その方途を現示しているのである。

なお、本資料の翻刻・掲載に関しては、遺族である松下静枝氏の下承を得ている。ここに記して、感謝申し上げます。

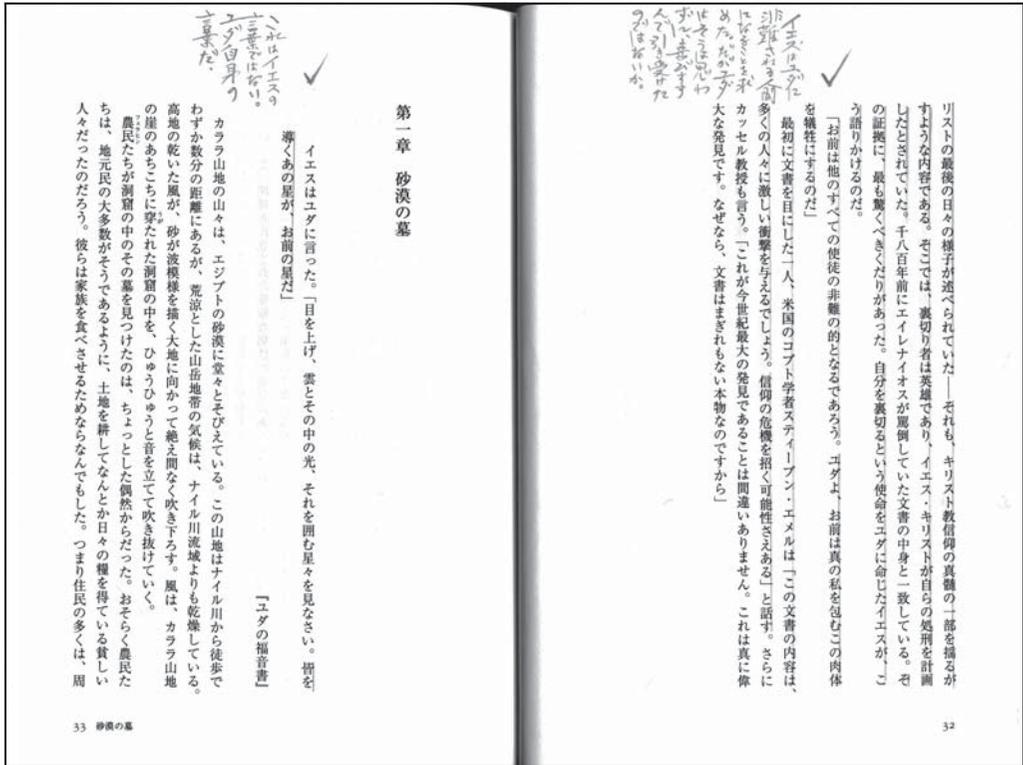
注

- 1) 岩間優希・原祐介「松下清雄蔵書目録 (1) ~ (3)」(『立命館言語文化研究』20 (2-4) 2008年11月~2009年3月)。
- 2) 松下静枝「松下清雄年譜」(『立命館言語文化研究』20 (1) 2008年9月)を参照。
- 3) 同上。
- 4) 詳細は、今西一「早稲田大学・1950年—歴史の証言—」(『立命館言語文化研究』20 (3) 2009年2月)を参照。ただし、この事件の真相は未だ明らかになっておらず、松下が運動を裏切ったという事実はない。
- 5) 松下清雄「あとがき」(『草青火——鳴かなかった鳥たちの祀り』新制作社 2006年)。

[複製・翻刻凡例]

- ・以下、上段に書き込みが施された箇所の複製写真を掲げ、下段にその書き込みの翻刻を載せた。
- ・書籍本文に記入された赤線やチェック記号は省略した。
- ・写真および翻刻のページ番号は、『ユダの福音書を追え』(ハーバート・クロスニー著 日経ナショナルジオグラフィック社 2006年5月8日)の該当ページである。

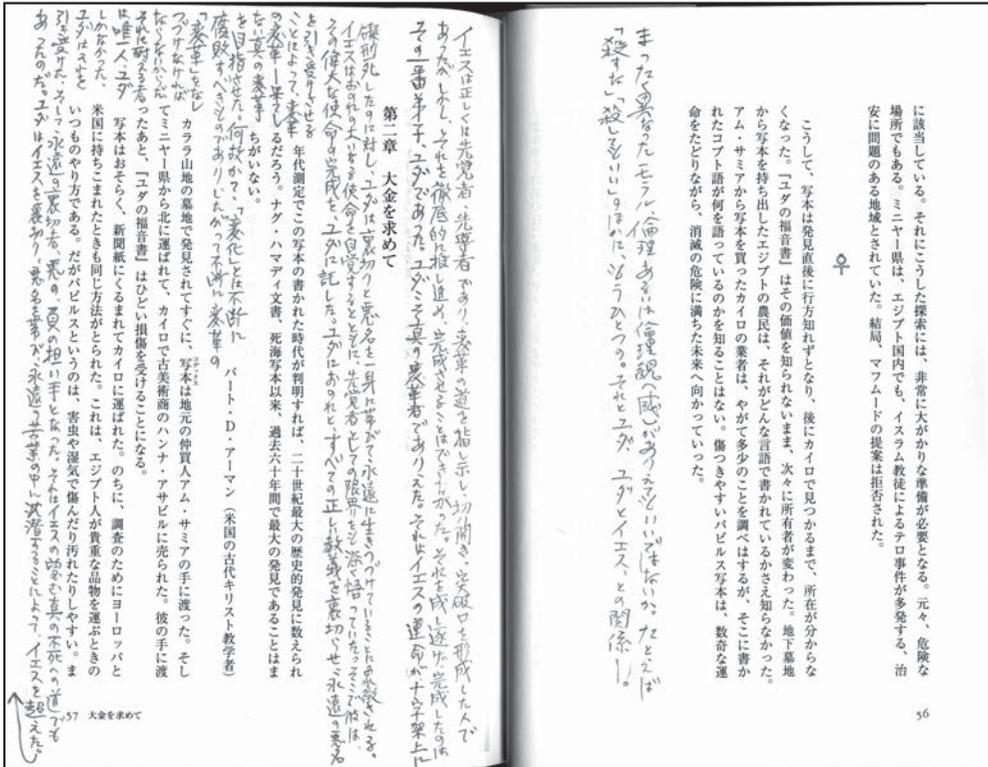
【写真1 : pp.32-33 書き込み】



【32頁】
イエスはユダに非難される人間になることを求めた。だが
ユダはそうは思わずに、喜びすすんで引き受けたのではな
いか。

【33頁】
これはイエスの言葉ではない。ユダ自身の言葉だ。

【写真3：pp.56-57 書き込み】



に該当している。それにこうした探索には、非常に大がかりな準備が必要となる。元々、危険な場所でもある。ミニヤール県は、エジプト国内でも、イスラム教徒によるテロ事件が多発する。治安に問題のある地域とされていた。結局、マフムードの提案は拒否された。

こうして、写本は発見直後に行方知れずとなり、後にカイロで見つかるまで、所在が分からなくなつた。「エタの福音書」はその価値を知られないまま、次々に所有者が変わつた。地下墓地から写本を持ち出したエジプトの農民は、それがどんな言語で書かれているかさえ知らなかつた。アム・サミアから写本を買つたカイロの業者は、やがて多少のことを調べはすが、そこに書かれたゴプト語が何を語っているのかを知ることはない。傷つきやすいパピルス写本は、数奇な運命をたどりながら、消滅の危険に満ちた未来へ向かつていった。

「まつたるをなつたモラル倫理あるいは倫理観(感)があらざるに閉ざられた」といふ「殺すな」「殺してもいい」のほかに、もうひとつの。それとユダ、ユダとイエス、との関係。

イエスは正しくは先覚者、先導者であり、変革の道を指し示し、切り開き、突破口を形成した人であつたが、しかし、それを徹底的に推し進め、完成させることはできなかった。それを成し遂げ、完成したのはその一番弟子、ユダであつた。ユダこそ真の変革者でありえた。それはイエスの運命が、十字架上に磔刑死したのに対し、ユダは裏切りと悪名を一身に帯びて永遠に生きつづけていることに象徴される。イエスはおのれの大いなる使命を自覚するとともに、先覚者としての限界をも深く悟つていた。そこで彼は、その偉大な使命の完成を、ユダに託した。ユダにおのれと、すべての正しい教義を裏切らせ、永遠の悪名を引き受けさせることによつて、変革の変革—果てしない真の変革を目指させた。何故か? 「変化」とは不断に腐敗すべきものであり、したがつて不断に変革の「変革」をなすつづけなければならないからだ。それに耐える者は唯一人、ユダしかなかった。ユダはそれを引き受けた。そして永遠の裏切者、悪の、負の担い手となつた。それはイエスの望む真の不死への道でもあつたのだ。ユダはイエスを裏切り、悪名を帯び、永遠の苦業の中に沈潜することによつて、イエスを超えた。

「まつたるをなつたモラル倫理あるいは倫理観(感)があらざるに閉ざられた」といふ「殺すな」「殺してもいい」のほかに、もうひとつの。それとユダ、ユダとイエス、との関係。

57 大金を求めて



